牛舎の快適性を考える

牛舎の役目の一つは、自然の脅威から家畜を守ることです。雨風や夏の暑さをさえぎり、冬の寒さや吹雪から家畜を守る。北海道のように四季が明確で冬の環境が厳しい地区では、なによりもこのことが重要でした。公社事業では「牛舎」のことを「避難舎」と呼ぶことにそのなごりを見ることが出来ます。

牛舎の二つ目の役目は飼養管理の効率化です。施設に家畜を集約することで給餌や搾乳、種付けなどの管理作業が飛躍的に省力化・効率的に行うことが出来るようになりました。人が「より楽に」「より多くの頭数を」管理できるようになったのも施設の発達があったからです。

しかし、このことは人の側に行き過ぎた管理体制をもたらしました。冬の寒さから「働く人を守る」換気を制限した「暖かい牛舎」。人が作業しやすいことを第一に考えた「家畜の行動を制限しすぎている牛舎」などが沢山作られてきました。

その転機が訪れるのは1990年半ば頃です。既存の施設は、牛にとって決して安楽なものではないことが指摘されはじめました。これが、「カウコンフォート」の始まりです。

「カウコンフォート」という言葉は生産性向上のキーワードとして瞬く間に広がりました。牛が安楽な状態であり、自由な行動を保証してあげることが重要であるとされ、牛舎ミニ改造の一大ブームがおこりました。

それから15年間、牛舎について考えるとき、牛の安楽性は最も重要な項目として認知されるようになりました。

21世紀の今、牛の安楽性はもはや当たり前です。牛舎の三つ目の役目は、「牛の自然な行動を妨げないこと」です。90年代のカウコンフォートは、例えば「牛床」「飼槽」「換気」というように、個々の事柄について安楽性を追求する、いわば点の技術でした。

これからは、その点と点をつなぐことが重要になっています。

寝ている牛が、立ち上がり、エサを食べ、水を飲み、また休む。寝ているその鼻先まで新鮮な空気を送り込む。この一連の動作をよどみなく、なににも邪魔されることなくおこなえる。他の牛との競合も可能な限りすくなくするような。このような施設が今の牛舎には求められています。

そこで、今年の技術資料は「牛の行動から施設を考えよう」をテーマに編纂しました。
「Ⅰ 休む」「Ⅱ 寝起きする」「Ⅲ 歩く」「Ⅳ 食べる」「Ⅴ 飲む」そして「Ⅵ 息をする」。

この一連の動作が滞りなく、滑らかにおこなえることをめざし、その要点について解説を加えてみました。

これから牛舎を新築しようと思っておられる方、牛舎の改造を考えておられる方々に少しでも参考になるところがあれば幸いです。